安陽考古概観

石璋如

【紹介】今世紀における世界考古学発掘の十指のうちに列せられる安陽殷墟の発掘は、一九二八年から三七年まで、前後十五回おこなわれたが、その調査の全貌を明らかにする概要報告は、今日まで十分になされていない。

石璋如氏は第四次発掘のとき、河南大学学生として参加して以来、連年この調査に参加し、戦争勃発以後は、その出土品の移管保護ならびに整理の任にあたり、現在、台湾の中央研究院歴史語言研究所・所員として、茫大な資料の研究、出版に専身しておられる。昭和三十五年日本へ遊学、京都に滞在された機会に、京都大学文学部において十月二十二日から五回にわたって『安陽考古概観』と題する特別講義を行なった。本ノートはその講演の平岡武夫教授（人文科学研究所）による通訳を、小野山節・吉本堯俊両君が書き直したものである。（樋口隆康記）

プロローグ

中国における考古の学としては、早く宋代に、『集古録』・『考古図』・『博古図』などの著述ができて金石学が成立し、清朝に至ってますます盛となったが、これはいわば書斎の考古学とでもいうべきものであった。

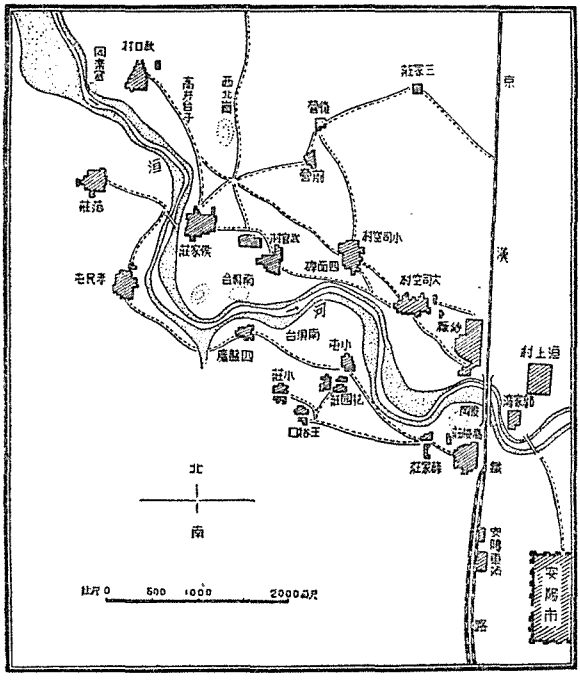
民国になって鋤頭考古学がおこった。一九二一年アンダーソンの沙鍋屯や仰韶の発掘、一九二三年リサンのオルドス調査、一九二六年浜田耕作の貔子窩の発掘、一九二七年ブラックの周口店の発掘などは、外人のおこなったもので、ときには中国人がそれに参加したこともあるが、中国人が自らその目的と組織をもって実施したのは、安陽発掘をもって最初とする。

中央研究院が初めての田野考古の場として安陽を選んだのは、それだけの理由があった。そのとき発掘候補地として、安陽・洛陽・臨淄の三ヶ所があげられたが、それについて、地理的・時代的・内容的三条件が検討された。当時中央研究院は広州にあり、そこから洛陽や臨淄に行くには汽車を乗り換えねばならなかったが、安陽は乗り換えなしで行ける地の利を得ていた。時代的条件をみ

れば、安陽は殷代、洛陽は周代、臨淄は春秋時代の遺跡である。また内容的には、洛陽には周代の銅器と漢代の石経があり、安陽は殷代の銅器と甲骨、臨淄は春秋の銅器と斉刀とをもっている。以上の三点からみて、安陽が最も適しているとみられたのである。

次に安陽の環境について述べるが、これは盤庚が殷の都としてここを選んだ理由を説明することになろう。殷はこれまでにも何回か都を遷したが、しばしば水害にみまわれていた。それが安陽に遷してはじめて水害からまぬがれ、それ以後遷都しなくなった。これは地形に関係がある様である。西方の高地から洹水が東へ流れ、中央の小屯附近は土地が高く洪水に侵される事はまずない。三方は台地、中央は平原で耕作に適し、その中を河が流れていて、土地の人はその地形を龍口吐舌と呼んでいる。西北には宝山があって大理石を産し、その麓では陶土もとれ、殷人の重要な資源地であった。この様に地形がよく産物に恵まれていたので、殷人がここを永住の地に選んだのである。

第1図　殷墟の位置



第一章　第一次から第三次までの発掘

第一次発掘①

まず発掘地点を選定する必要があるが、土地の人に甲骨の出る場所を聞くことからはじめた。そのうちの西北の綿畑で盗掘坑をみとめ、ここが確かな地点だとみられたので発掘する事にした。

三つの地区――沙丘区・沙北区（粟畑）・村中区をきめ、それぞれに一四溝、一二溝、一四溝のトレンチを掘った。一つのトレンチは、長さ二メートル・幅六〇センチの大きさがあった。発掘法は三種の方法を採用した。

次	地　点	日　期	人　員	記　事
1 1928年	小屯：河邱 邱北 村中	10月13日～30日	主持：董作賓 参加者　5人	方法：輪郭・集中・打深 発現：甲骨・獣骨・陶器等
2 1929年 春	小屯：村北 村中 村南	3月7日～5月10日	主持：李済 参加者　5人	方法：点的発掘 縦・横・斜・連・支 発現：殷商文化層 隋唐墓葬・現代堆積
3 1929年 秋	小屯：西北地区 村北区 南霸台	一）10月7日～21日 二）11月15日～12月12日	主持：李済 参加者　4人	方法：線的発掘 発現：遺跡・長方坑・円坑 遺物：銅・石・陶・亀甲 獣頭刻辞 墓葬：銅器墓・隋卜仁墓

1、輪廓法

真中に灰土を見つけると、それを中心にして、周辺から灰土の方に向って発掘を進める方法。

2、集中法

偶然灰土を発見したとき、その範囲がはっきりしないので、そこを中心にして四方にひろげる方法。

3、打深法

天花粉の原料を求める場合のように、鏟廊任意に地面を掘って灰土をさがす。前の二法の準備としてなされる。

第一次発掘の出土品には、甲骨が多数であり、そのうち有字骨が七八四片も含まれているが、その出土地点は当時の貯蔵所であったとは思われない。また、獣骨、陶片、後代の墓などが発見された。

第二次発掘②

発掘地点は次の三ケ所を選定。

村北区　トレンチ　六本（T—V・X—Z）

村中区　トレンチ　二五本（第一次と同地点）縦溝（縦I）・横溝（H）・斜溝（S）・連溝（C）・支溝（B）

村南区　トレンチ　一三本（A—M）

この調査の結果、小屯には三層が区別された。(1)殷商文化層、(2)隋唐墓層、(3)現代堆積層である。トレンチは深さ九メートルで地下水面に達する。文化層は沖積によって堆積したものらしい。出土品としては、村中区より字骨が、村北区より鏟がでた。

第三次発掘③

村北沙丘地区で二ケ所、西北区の洹河の南岸で三トレンチを発掘した。発掘法は改良されて線の発掘となり、縦（南北）・横（東西）に長いトレンチを引き、各溝を一定の長さに区切る。縦溝の場合、幅一メートルのトレンチを長さ三メートルずつに区切り、

それに南から甲乙丙丁……癸の符号をつけ、その一〇区を一組とし、各組にも南から一・二・三の番号がつくので、各区は、一甲・一乙・一丙……と呼ばれる。横溝の場合は幅一メートルの溝で、各区の長さは単位が大きく一〇メートルとし、中央の一〇〇メートルのあいだは、ただ東から西へ、甲一癸とつけ、それより東の一〇〇メートルへは、東甲・東乙……と、西の一〇〇メートルへは、西甲・西乙……とつけ、全長三〇〇メートルの範囲はこの中に含まれることになった。

基準溝と基準溝との間をつなぐ坑を連坑といい、さらに縦横の数坑をつらねてその間を全面発掘したものを大連坑という。

今次のトレンチの数は一一八溝で、地層はあまり乱されていなかった。

遺構として長方坑一〇個と円坑一個とが発見され、出土の遺物も完形品が多かった。

銅器　鏃・矛・鋲・刀・鋳銅の笵

石器　一〇〇〇点以上あり、石刀（石庖丁）・斧・鏃などが主で、とくに抱膝跪坐の人物石彫像が注目される。

土器　仰韶式彩陶片のほかに、白陶・釉陶・灰陶がある。

卜甲骨　四枚の大型亀甲板が大連坑から出た。そのほかに牛と鹿の有字骨がある。

墓では、隋の卜仁墓が発見された。墓誌銘によれば、仁寿三年に死んでいる。銅器時代の墓としては、俯身葬三例、仰身葬二例があり、副葬品に銅戈があり、容器では、銅器でも土器でも、觚一・爵一が組となり、早期の墓には、そのほかに鬲と罐が入っていた。

これまでの発掘によって明らかにせられた点を要約すると、次のようになる。

一、殷墟の範囲　小屯村の北方に小さな天然の溝があり、その溝の東からは甲骨が出るが、西からは出ないことが、三回の発掘によって明らかにされた。しかし、まだ、この甲骨の出る範囲が殷墟であって、その外方は殷墟でないとはいえない。第三次の南覇台（西北区）の発掘によって出土した圜底尊は、小屯の村北区で甲骨と同じ層から出土した圜底尊と全く同じものである。

二、殷墟の文化層の堆積　殷墟には殷代・隋唐代・現代の三文化層があり、そのうち殷代の層と隋唐代の層との間には、相当の間隔があるのに、そこからは一つの屈葬例を見つけただけで、ほかには何も発見しなかった。隋唐代には、ここは大きな墓地であった。そのため若干の殷代文化層が乱されているところもある。

三、殷都が廃棄されたのは、主に洪水によると考えられる。堆

積している遺物のうち、石のような重いものは下方にあり、甲骨のような軽いものは殷層の上層にある。また地層に水の渦の形（波浪文）が模様として残っている。

四、殷代の鋳銅　殷墟の墓の副葬品には甗などの銅器があり、また鋳銅用の笵も発見され、その文様が銅器の文様と一致するから、殷人がこれらの銅器を作ったといえる。

五、石彫　半身の石彫像は、上方が欠けているが、人像である事は確かである。当時、立体的な石彫像としては、陝西省の霍去病の墓にある馬が匈奴を踏んでいる像と、長安の西方斗門鎮にある牽牛織女の像の二つ[4]が最古のものとされていた。それは漢代に属するから、今度の殷墟での発見は、中国における立体石像を一〇〇〇年遡らせたことになる。

六、土器　一般には灰陶がつかわれたが、これには文様のあるものと、ないものとがある。次の白陶は、銅器の文様と似た図文をもち、宝器とみなされている。釉陶は、薄くてきめが細く水が漏らないので、水や酒を容れるのに適しており、相当高温で焼かれたようで、中国における磁器のはじまりといえる。

七、文字　これまで甲骨は小さい破片しかなかったので、卜辞を読む順序がわからなかったが、大亀四版がでて卜辞を読む方法が判明した。すなわち、真中から右にあるものは右によんで行き、左にあるものは左によんで行く。また旬を卜する記事があって殷代の暦法がわかり、貞人の時代もはっきりして、甲骨文の年代を決める重要な基礎が出来た。また卜辞以外に、獣頭にある文字は記事であることがわかった。

八、坑穴　長方形と円形の穴からいろいろのものが出土、内部が乱されていなかったので貯蔵穴であったと思われる。長方坑内から人骨のでた例は、水面に近いところにあったので、水葬かという人もあった。

九、葬儀　殷代の葬法として知られた俯身葬と仰身葬の二法は、地層からみると、前者が下位、後者が上位にあったので、当時は時代の差と考えていた。

十、隋代の墓　これは殷代とは関係のないものであるが、小屯の地層に関して重要な意味を持っている。また副葬品として駱駝や馬の土偶がでたことは、従来唐代まで知られていたこれらの遺品が、隋まで遡ることを明らかにした。また磁器の碗は薄手の褐色をしたもので、隋代にも非常に優れた磁器のあることが知られた。

以上の認識は、正しいもので定論になったものもあれば、間違っていて後に修正を要したものもある。そのことは後になって、次第に判明して来たのであり、今日の知識からみれば至極平凡な

ものでも、これを発見した当時においては驚異に値するものであった。

第二章　第四次より第七次までの発掘

第三次発掘の終了後、止むを得ない事情のため、次年度の安陽発掘は中止となり、代って、中央研究院は山東城子崖[5]の竜山文化の遺跡を発掘したが、これが爾後の安陽の調査に重要な影響を与えた。たとえば

一、城子崖では、夯土からなる城壁が発見されたが、安陽にも夯土の城壁があるかどうか。

二、遺物として、城子崖では、灰陶・黒陶・無字卜骨があったが、安陽に黒陶があるかどうか。

三、城子崖での層位は、下層が竜山文化層、上層が春秋時代層の両層であったが、安陽の層位が城子崖の両層の間にはいるかどうか。

次の第四・五・六次の安陽発掘[6]は、この新しい比較資料を得て、その解明を目的として実施されたのである。

発掘の方法も改新された。組織は中央研究院、河南省、河南大学の三者が共同で行なうことになり、調査員をふやし、測量技師、写真技師、その他の技術員も加わった。発掘本部も整備され、作業時間も一定した。発掘地点はAからHまで分け、小屯村西南の主標点にはじまる基準の標点網をつくり、平翻（全面発掘）地点は一〇メートルごとに、非平翻地区は三〇メートルごとに線をいれ、トレンチもA_1B_2という符号をつけ、方位もこれまでの太陽の方向による方法を改めて、磁石の方位を採用した。

記録法も一定させた。たとえば、トレンチの位置は、

A10	N80 E50

A地区の第一〇トレンチの南北坑で、その西南隅は標準点より北へ八〇メートル・東へ五〇メートルのところにある。

B 2	E90 N30

B地区の第二トレンチは、標準点より東へ九〇メートル、北へ三〇メートルのところにある。

出土品の位置は、各トレンチの西南隅を基準にして、そこから北へxメートル、東へyメートル、深さzメートルで示す。

その他、遺物の登記・編号・梱包なども整備された。

以上の四回の調査における重要な発見[7]を要約すると次のようになる。

中心地帯の小屯では、遺址は地上の基址と地下の穴窖に大別される。

次	地点	分区及坑	人員	日期	記事
4 1931年 春	小屯	A 25 B 26 C 29 D 10 E 32 支 23 145処	主持：李済 1 中央研究院 8 河南省 5 河南大学 2 16人	3月21日 〜 5月11日 52日	
	四盤磨	東区 西区 21	呉金鼎	4月16日 〜 4月30日 15日	L形トレンチ 堆積は小屯と同じ 殷代晩期墓葬
	後岡	岡東 西 南 北 25坑	梁思永 1 外 2 3人	4月16日 〜 5月12日 27日	分射式トレンチ 東：白灰面 南：白灰面殷 西：灰土深 北：灰土浅
5 1931年 秋	小屯	B 41 E 29 F 7 支 16 93	主持：董作賓 1 研究院 4 河南省 1 河南大学 2 清華大学 1 安陽県政府 2 11人	11月1日 〜 12月19日	B区：全面発掘 E区：細部調査 F区：略査
	後岡	東南 西南 20坑 西北	主持：梁思永 1 他 3 4人	11月10日 〜 12月4日	東南：白灰面八処：23面 西南：三層堆積
6 1932年 春	小屯	B 22 E 60 82	主査 李済 1 研究院 6 河南省 1 河南大学 1 9人	4月1日 〜 5月31日 2ヶ月	四大目標 基地の範囲清掃 穴窖の輪郭追求 層序の確認 上下層遺物の分清
	高井台子 侯家莊	仰韶区 黒陶区 三層区 33	呉金鼎 1 他 1 2人	4月8日 4月16日 9日	後岡に似た三文化層
	王裕口 霍家小莊	一区 9坑 南北 110m	李済 呉金鼎	4月14日 〜 5月15日 1ヶ月	
7 1932年 秋	小屯	A 16 B 38 C 54 E 89 197	主持：李済 1 研究院 3 河南省 1 5人	10月19日 〜 12月15日 約2ヶ月	A区 観察 B区 清理 C区 線掘 E区 面掘

基址は地面より高く版築土からなり、次のような種類がある。

一、方形　黄土堂基

二、長方形

a 中門式　中央に階段がある。大型。

b 隅門式　隅に階段がある。小型。

三、凹字形

穴は地下に掘りこんだもので、面積がひろく、深さの浅い居住用である。形に二種ある。

一、円形　c64穴は、径一〇メートルあり、外周に柱穴がめぐっており、内部は階段によって出入する。

二、楕円形　E164穴は、長径八・五メートル、短径三メートル、深さ四・六メートルある。

窖は、深くて狭い貯蔵用で、両壁の脚窩を利用して出入する。

一、円形　E16

二、長方形　E181は、地面下三・八メートルのところに上口があり、その大きさは、二×一・五メートル、深さ八・三メートルで地下水面に達した。内部から五七種の遺物五八〇一件がでた。

三、ヘチマ形　FHIは小型で、中央のくぼみに脚窩がある。

これらの遺址からの出土遺物には、玉器・石器・陶器・骨角器・貝殻・銅器・金などがあげられるが、そのうち虎の頭骨・象の下顎骨・鯨の肩胛骨・有字鹿頭骨などがとくに注目される。

殷墟の西側地帯にあたる四盤磨村では、墓葬が発見され、銅器・陶器の爵・觚を出したが、これらの墓は殷代の灰層をけずっているので、小屯期より晩いとみられる。

王裕口の北、霍家小荘の東のところを発掘して、墓八基を発見したが、副葬品は少ない。ここの層位は上層が殷墟の時代、下層は黒陶文化に近い時代である。

外囲地帯として、後岡[8]では、仰韶期・竜山期・殷商期の三層があり、その上から漢代墓が発見された。ここではじめて発見された白灰面は竜山期に属する居住面で、径四メートル、中央に径一メートルの焼土がある。

高井台子（侯家荘）では、仰韶式陶片だけを出す仰韶区、厚手の黒陶を出す黒陶区、灰陶・黒陶・紅陶が三層に重なった三層区があり、大体の堆積は後岡ににている。

以上の四点から七次までの調査によって明らかになった点を指摘すると、

一、殷人が到来する以前の安陽には、仰韶文化人と竜山文化人が占居しており、堆積層の様相からみて、それはかなり長期にわたっていたとみられる。

二、第三次までの観察の修正として、安陽の文化層は洪水によって堆積したと解釈されていたが、層内に波浪痕があるといっていたのは、実は版築の際の夯打痕であったことが判明、水害説は否定されるに至った。

三、殷人の住居については、地下の穴居と地上の宮室の二種が存在するが、殷の末世は穴居から宮室へ移る過渡期とみとめられる。宮室は版築の基址の上に建てられたもので、そのうち黄土で築かれた基址は、宮殿中でも最も重要な建物として、明堂か宗廟ではなかったかとみられる。

四、鋳冶については、実物の銅器のほかに鋳銅范が出土しているので、実際に殷人が鋳冶したことは明らかである。また金細工もおこなわれた。

五、出土遺物によって、殷代の対外交通や嗜好の様子がしられる。E区から出た鯨骨は東海との交通を暗示するし、象や緑青石は熱帯の産物である。また虎の頭蓋骨が出ているので、当時猛獣狩がおこなわれたこともしられる。觚や爵の出土は、殷人が酒を好んだことを意味し、陶塤や石磬は音楽もかなり進んでいたことを示している。

第三章　第八次および第九次の発掘

一、濬県の発掘が安陽調査に与えた影響

第七次の発掘後、殷墟の調査はしばらく停止した。原因は人員の不足である。これまで安陽で七回、城子崖でも二回の発掘をおこなったので、出土品は多くなり、それらを整理する人員を必要とした。安陽第六回の発掘中、濬県辛村の発掘⑨をはじめたので、安陽と辛村の発掘および出土品の整理という風に、作業が三分されたために人員の不足を来したのである。濬県は墓地であり、墓地の発掘は開始すれば最後まで続けなければ危険である。安陽は遺跡の発掘であり、いつでも仕事をすることが出来ると考えたのである。安陽と濬県とは別の遺跡であるが、濬県の発掘が安陽の調査に及した影響が非常に大きいので、そのことをここで論述したいとおもう。

まず、中国の考古学的研究において重要な鍵である夯土については、これまで城子崖と安陽の発掘によって、二つの用途があきらかにされた。

第一に夯土の城壁は、城子崖の発掘ではじめて知られた。しかし、上層にはあったが、下の竜山期の層には夯土の城壁はなかっ

た。

城子崖の発掘後、殷墟の発掘を継続したが、そのひとつの目的は、夯土城壁の発見であった。それは果せなかったが、その代りに非常に立派な基址を発見した。殷代における夯土城壁の有無は今なお不明である。

次に、墓にも夯土のあることが濬県の調査によって明らかにされた。濬県の停車場から辛村までの路は雨期には川になる幅五～六メートルの路溝である。この川岸は一二メートルの崖になっている。西方には黒山があり、坂になっている。この路溝と坂の崖は天然のトレンチをなしており、地層下の状態の観察では、深さ一〇数メートルで幅も一〇数メートルにおよぶ夯土の層が発見されたが、その夯土を穿って穴居した痕跡がみとめられ、今でも穴居している人がいる。

これまで、夯土が基址と城墻の二つに使われていたという知識をもって、ここの夯土に対しても二つの違った解釈が生じた。河南省政府から安陽の発掘に派遣され考古学的知識も相当持っていた馬非百は、当地が川に臨んでおり、雨期には水が流れるという環境と、かかる大きな夯土層は城子崖にも安陽にも見当らなかったという経験から、これが川の堤であると主張し、われわれはこれを馬公堤と称した。一方濬県発掘調査の主任である郭宝鈞は、ここの堆積は夯土の方が先で、川の流れがあとにできているから、堤でなく墓であると主張し、われわれはこれを郭公墓と呼んだ。この両説には、それぞれ賛成する人が相半ばしていた。そこで、長さ一〇メートル・幅一一メートルのトレンチを掘ったところ、銅戈が出土した。堤に戈を埋める筈はないから、これは馬公堤ではなく郭公墓の方が正しいことがわかった。かくて、夯土には、壁・基址・墓の三つの場合があることが知られたのである。

この濬県の墓は三種類に分たれる。一つは大墓で、墓室の外に二つの墓道があるものと、墓道の全くないものとがある。二は小墓である。墓道を欠き、長さ二～三メートル、幅一～二メートル程度のもので、銅器を副葬するものと、土器を副葬するものとがある。三は車馬坑である。地面下の深さは、大墓で約五メートル、車馬坑は三～五メートル、小墓は約五メートルである。墓の種類を問わず、墓の内部はみな夯土からなっている。かくて、われわれは夯土に対する認識をあらたにし、第八次発掘以後は、基址のほかに墓をも夯土層中に求めるようになったのである。

二、各遺址の状態

第八次・第九次の二回の調査で五ヶ所を発掘したが、そのうち四盤磨は墓が一基あっただけであるから今回はふれない。

小屯遺跡

次	地点	分区及坑	人員	日期	包含	記事
8 1933年 秋	小屯	D：136坑	主持：郭1 院方 4 省方 1	10月20日 ～ 12月25日 67日間	殷代基址 殷代穴 竜山穴	開坑
	後岡	東区 34 西区 23 } 57		11月15日 ～ 34年1月3日 1月15～24日	殷墓	
	四盤磨	2		11月15日 ～ 11月21日	灰土殷墓	
9 1934年 春	小屯	D：4 E：1 G：23 28	主持：董1 院方 4 省方 1	3月9日 ～ 3月30日	殷穴	
	後岡	東区 西区 } 35		3月15日 ～ 5月22日	殷墓	
	武官 南霸台	8		4月30日 ～ 5月22日	殷商文化層 竜山文化層	
	侯家莊 南地	東区 西区 } 120		4月2日 ～ 5月31日 約2ヶ月	戦国文化層 殷商文化層	墓19

A　層位　基本現象として、非常に明瞭な二文化層の区別を確認したが、上が殷商文化層、下が竜山文化層である。

地層の要素としては、夯土・灰褐土・褐土・殷代の穴・竜山期の穴・隋唐墓の六つがある。これらの諸要素の重複関係は次の様である。

①上に夯土、下に殷穴がある。
②上に夯土、下に竜山期の穴が直接に重なりあっている。
③上に灰褐土、下が竜山期の穴。
④上に殷穴、下に灰褐色土がある。
⑤上は夯土、下は褐色の生土層である。
⑥殷代の窖が横にあり、その隣りに上に夯土、下に殷代の穴が層をなしている。
⑦横に殷穴があり、隣り合って殷穴（下）と夯土（上）とが層をなしている。
⑧上から夯土・殷穴・竜山穴と三層をなす。
⑨上層が隋唐墓、中層が夯土、下層が殷穴。
⑩隋唐墓が殷穴の上に直接接している。
⑪上に隋唐墓があり、直接褐色土に接している。

以上を統合すると、三大層序の存在を知る。一番上が隋

唐墓である。中層の殷穴・殷の窖・殷代灰褐土層などは殷商文化層である。竜山期の穴は、下層の竜山文化層である。

B　基と礎　　基は家を建てる土台である。今回の発掘で基に三型式あるのを発見した。夯土でたたき固めた基礎、灰褐色土の基礎、それより硬い硬褐色土の基礎である。

礎には、夯土製・石製・銅製の三種類があり、夯土製のものは長方形または方形の墩になっている。石礎は天然の石塊を使っていて、径約三〇センチの大きさである。銅礎には三型式がある。一つは上凸下凹の瓶蓋形で、柱が乗った時安定する。第二は円形丸底の鋳造品で、断面は鍋形をしている。第三は大きな銅器の破片を利用したものである。

このうち、夯土の礎は比較的少なく基址の外方にあるが、石礎と銅礎とは基址の内面にある。銅礎は石礎の上に乗っている場合、石礎の横に並んでいることもある。銅礎と石礎が上下になっている方が多い。後者が原状のままを示しているのか、ころがったのかわからない。

柱は、夯土墩・石礎・銅礎のそれぞれの上に見られるが、焼けて炭化した痕跡や焼け残りの実物もある。最長の例は五〇センチだが、短かいものが多い。

基と礎との関係は三種ある。甲四・甲一一基址のように礎が基址の内周に並んでいるものと、甲一二基址のように基址の外側を周っているものと、礎の全くないものとである。前の二種類は、今日の住宅においても見られるものであるが、第三の礎石のないものは、基址が耕作などで削平された際に除去されたのかも知れない。

最大の基礎は、一〇個の銅礎をもち、長さが四六・七メートル、幅が一〇・七メートルある。

C　殷商期と竜山期の異同　　この二つの遺跡の様子は非常に異なり、殷商文化層が遺物を多く包含するのに対し、竜山期にはほとんど含まれていない。

	殷商期	竜山期
穴	大きく深い	小さく浅い
窖	階段がある	階段がない
基址	ある	ない
銅器	ある	ない
甲骨	ある	卜骨のみで卜甲はない
石製品	卜辞がある	卜をした跡のみで卜字はない
骨器	人間の体の様な石の彫刻	粗末な石刀のみ
貝殻	非常に精巧	非常に粗末
	鳥形笄がある	鋸状の錐らしいもの
	多様な形に加工	簡単な蚌刀のみ
	象嵌に使用	

後岡

後岡では、これまでに二回の発掘調査がおこなわれたが、この第八次・第九次の両回の発掘において、三文化層からそれぞれの遺物を出土したこと以外に、大墓と小墓よりなる殷墓[10]の発見が重要である。

小墓は六基を調査したが、そのうち形のわかるものは三基である。構造は簡単で、棺が内側に、槨が外側にあり、棺下に腰坑がある。腰坑には狗を埋め、棺には人を収める。棺と槨との間に副葬品をおき、二層台には殉葬者をおく。墓形の明瞭なものも盗掘にあっており、副葬品としては銅甗一個が出土したのみであった。H321B号墓においては、殉葬は南側と西側に俯身葬されていた。棺も人骨も腐敗してしまい、痕跡を残すだけである。槨の角材は井桁につみあげてある。

墓形の不明のものは非常に浅く、わずかに三―四センチの表土をはぐと、骨などが出土する。もともとこんなに浅いものではなく、上部が失われたのである。銅觚・銅爵・銅戈・鏃・鏃の五個の遺物が出た。

大墓は第八次の調査のおわり頃に発見された。すでに盗掘をうけていたが、安陽第一の大墓であるので、薪をもやし氷雪とたたかいながら、翌年まで調査を継続した。第八次の調査の延長で槨室を、第九次の調査で墓道を発掘した。盗掘者は非常にうまく無駄なく丸い穴を穿って墓室をほりあて、副葬品はすべて失われていた。彼等がほりのこした四隅に二七個の頭蓋骨が発見された。

墓の構造は、亜字型の槨室で、南北七メートル、東西六・二メートル、槨室の底までの深さ八・五メートル、腰坑の深さ〇・五メートル、合計九メートルで地下水の水位に達する。腰坑は、南北一・二メートル、東西一・一メートルである。

北墓道は、長さが一一・六メートル、幅が二・五五メートル、階段が二三段ある。南墓道は長さが二〇メートル、幅が二・二五メートル、坂道になっており、車具が出土した。それは方槓頭と円槓頭の二種類で、円槓頭のところに方槓頭がはまることがわかった。後世の轄に相当する。

土器	大部分が灰色で紅色のものもある 黒色は非常に少い 厚手 刻文 太い縄席文 方丁文（方眼の線を陰刻、内側が突出する）	黒色と灰色 薄手 幅の広い条文 細い縄席文 方格文（方眼の線が陽刻、真中の部分がへこむ）
文様		

南覇台

洹河をはさんで、北に南覇台、南に四盤磨村がある。この南覇台は三方が砂地で、なだらかになっているが、洹河はもともと南覇台の北側を彎曲して流れていた。清朝初期に四基の製粉場が設けられていたので、四盤磨村とよばれた。後に洹河が河道を変じ、南覇台の南を真直ぐ東へ流れるようになった。甲骨が出土した地点は少し高いところで範囲が非常にせまいので、十字型トレンチだけで十分遺跡の状態が把握された。

ここの文化層は、小屯と同様で、上層が殷商文化、下層が竜山文化層であることがわかった。殷商文化層には穴があり、すでに盗掘をうけた墓がある。竜山期には灰色上層があるだけで、穴の痕跡はないが、遺物は多くふくまれていた。調査したおりは、当地が人間の築きあげた人工のものか、それとも自然のものかが問題であったが、竜山期の遺物が出土したので、竜山期以前から存在した自然のものであることがわかった。河流の彎曲部の内側を彎とよび、反対側の突出部を嘴とよぶが、河流が彎曲せずに直流すると、この嘴の突出部分が残ることになる。この様にして形成された自然の岡で、人工の堆積ではない。

侯家荘南地

ここも、他の地点と同様に舌状台地である。小屯では北と東が河に面していたが、侯家荘では西と南が河である。河はゆるやかである。侯家荘の西側の洹河に面したところは五メートルの崖になっており、北側は砂地、南側は絶壁である。小屯の発掘中に侯家荘南地で有字骨の出土を聞き、人を遣して試掘さしたところ果して出土したので、小屯の発掘を中止し、調査員を侯家荘に集中した。侯家荘を東西二区に区分し、西区は南の方へ、東区は北の方へ発掘をすすめた。遺跡は広大であるが、発掘した範囲は東西一〇〇メートル、南北二五〇メートルである。

侯家荘の文化層は比較的簡単であり、上層は戦国時代の文化層、下層は殷商期の文化層である。上層はうすく遺物も包含されていない。そこで下層について遺物と遺跡に分って論述する。

殷商期の遺跡には次の如きものがある。

基址　三個所ある。

穴　円形・長方形・楕円形・不規則形。直径五〜六メートル、深さ約四メートル。

窖　円形のものは、径約二メートル、深さ約四メートル。長方形のものは、長さ一・八メートル、幅一メートル、深さは地下水面に達する。

墓　大墓と小墓がある。小墓は一八基、後岡のものとほぼ同じである。大墓は一基のみで、後岡のものに比して小さい。完全

に盗掘され、遺物は残っていなかったが、一塊の花土[11]があった。この花土の文様は竜形と星形で、赤と白の二色である。

夯土穴、基址と穴とを合せた様なものが一個ある。真中の穴の外囲が夯土で、長径が四～五メートルある。夯土の部分には礎石があるが、その位置は後人によって乱されている。穴中からは灰土と陶片がでた。われわれが、「大亀七版」とよんでいるものが出土した重要な地点である。

遺物は数量は多いが種類は少ない。

有字骨は四〇余あり、有字甲は、いわゆる大亀七版がでたが、背甲一個、腹甲一個がある。董作賓の研究によって、康丁の頃の一人の史官によってかかれたことがわかった。

土器には、盆・盂・鬲・罐の四種類が非常に多い。盆は、灰色で繩蓆文のあるものもある。盂は、無地・繩蓆文・刻文以外に獸頭をともなうものもある。盂の刻文の中には、まず繩蓆文をつけておき、あとで刻文をつけ、さらに刻文の一部を消してしまうという手のこんだものもある。鬲は、砂質灰色で繩蓆文が非常に多い。罐は、泥質赤色のものが一番多く、小屯では少量であったのに対し、侯家荘では非常に多かった。

第八次と第九次の調査の要点をまとめると、次のようになる。

遺跡数	トレンチ数	大墓	小墓
四盤磨	二		一
後岡	九	一	六
南覇台	八		一
侯家荘	一二〇	一	一八
小屯	一六四		

一、小屯の周辺地区では、どこでも墳墓があるのに対し、小屯だけにはない。そして基址が多い。これは、小屯が墓地ではなく、宮廟の地であったことをあきらかに物語っている。

二、殷都に火災によって廃棄された可能性がある。先述の銅礎をともなった大きな基址には、赤く焼けた土の薄層や、炭化した柱、また銅礎の周囲には銅が熔けてできた小さな玉などがある。東西の二柱間のおびただしい炭痕は、梁が焼けおちたようにおもわれる。

三、甲骨は、以前には小屯にのみ出土し、他の場所では出土しないと考えられていた。ところが、第五次の後岡の発掘で、長方形の窖から甲骨一片が出土し、また第九次の侯家荘南地の発掘で、大亀七版と甲骨四〇片あまりを発見したので、小屯以外でも、甲骨の出土することがわかった。

四、甲骨の収蔵の問題として、侯家荘において、字骨の出土地点からは字甲が出土せず、字甲の出土地点には字骨のないことが

知られた。両者の出土地点間の距離はそう遠くはないが、異る場所に収蔵されたことがわかる。

五、この二回の発掘調査は、われわれの信念をたかめ希望を大きくしてくれた。東向きの大きな夯土の基址が発見されたのだから、南向きのもっと大きな基址があったはずである。

後岡の大墓は、墓道から墓道まで三八・六メートルをこえる、これまで知られた安陽第一の大墓であるが、濬県辛村の衛侯墓と比べると小さい。安陽は、殷の帝王の都であり、帝王墓は、当然諸侯墓より大きいはずであるから、後岡の大墓は殷の帝王墓ではない。

夯土が基址や墓内の土層であることがはっきりし、また小屯でより大きな殷代の宮殿を発見したので、小屯以外の場所において、更に大きな墓の発見の可能性をもつことになった。故に、この二回の発掘調査は、殷墟発掘の歴史において最も重要な意味をもっているのである。

第四章　第一〇次から第一二次までの発掘

この三回のシーズンには西北岡・同楽塞・大司空村・范家荘の四個所を発掘した。そのうちでも西北岡が最も重要である。

一　西北岡[12]の鳥瞰

西北岡は小屯から西北へ三キロ、侯家荘・武官村から一キロ北にあり、少しく高い岡になっており、その高低差は三メートルである。北の楛河村・南の侯家荘・武官村・西の秋口村、東の小営村（前宮子と後宮子に分れている）に囲まれた東西二キロ・南北三キロのひろびろとした範囲である。この平地の真中に楛河から侯家荘・武官村へ通じる道路が一本あるが、附近に人家もなく、とくに冬などは誰一人通る者もないさびしいところで、その為いろいろの伝説が語られている。

昔、楛河村に一人の男がおり、毎朝車を押して武官村を通り安陽城へ野菜を売りに行っていた。ある日、朝早く起き、野菜車を押して西北岡まできたところ、光がきらきら輝いているのを見て、車を止めた。まだ安陽城まで行きついていないのに、人が大勢いるのを不審に思ったが、ここで野菜を売ると、瞬く間に全部売れてしまった。しばらくして鶏が鳴くと、人々が皆いなくなってしまった。夜が明けて周囲を見まわすと、あたりの塚の上にいずれも一握りの野菜がのっかっていた。彼ははじめてそこが鬼集すなわち幽霊の市場であることを悟り、爾後は朝早くそこを通って野菜を売りに行くのをやめてしまった。

この様な伝説がどうして生れ伝えられたのであろうか。それはここに塚が累々としてあり、その墓を掘ると多くの人骨が出てく

るのを見て、宋以前の人々がこの様な話を作り出したのではないであろうか。かくて、西北岡の墳墓群は以前から知られていたと考えられる。

西北岡は棉畑であるが、その上は現在も墓地になっている。灌漑用の井戸を掘ったり埋葬のために墓穴を掘る時、銅器の出ることがあった。このことが早くから知られていたので、ここは遺物の豊富な場所であるという見当はついていた。

この西北岡は、大部分が武官村の人々の畑であり、一部分が侯家荘の人の所有である。武官村は、その東南にあるので、武官村がここを西北岡と呼んだが、侯家荘の人も西北岡と呼ぶようになり、地名として固定してしまった。発掘担当者も侯家荘に宿泊していたが、やはり西北岡と呼ぶことにしたのである。

この西北岡には中央に道路が通じており、西側には双大井と呼ばれる大きな井戸二基があり、東側には大きな柏樹の植わった墓地がある。それらを用いてこの地点を呼ぶことも出来るが、ここ全体が非常に遺物の豊富な地域であるので、小範囲の地名で規定するよりも、この場所を一括して西北岡と呼ぶこととした。そして、H・P・Kの記号を附したが、これは西北岡の中国音、Hsi・Pei・Kangによる。

二　発掘

次	地点	日期	人員	記事
10 1934年 秋	西北岡	10月3日～12月30日	主持：梁思永 院方　6人 省方　1人	分東西両区
	同楽塞	10月29日～12月5日	梁・石・胡	彩陶・黒陶・殷墓
11 1935年 春	西北岡	3月10日～6月15日	主持：梁思永 院方　8人 省方　1人 清華　1人	分東西両区
12 1935年 秋	西北岡	9月5日～12月16日	主持：梁思永 院方　1人 省方　1人	分東西両区
	大司空村	10月20日～12月5日	劉	穴窖37　墓葬64
	范家荘	10月20日～11月7日	祁	銅器時代墓葬　1処

三　墓葬

ここの墓は大墓と小墓に分れる。大墓は二型式ある。墓道が四

本あるものと、二本のものである。前者はまた二種類に区分できる。墓室のプランが亜字形のものと長方形のものである。亜字形墓は一〇〇一号墓であるが、墓室も棺穴も亜字形である。棺の中心下の腰坑の他に八個の小坑を棺穴に掘り、それぞれに戈を持った人間が一人二匹の犬と共に埋められている。腰坑のは石戈、周囲の八坑のは銅戈である点だけが異なる。この墓は出土品も多い。長方形墓は、墓室は長方形であるが、棺穴は亜字形をしており、腰穴は一個である。一〇〇二、一〇〇三、一〇〇四号墓がその例である。

小墓は副葬品によって、人墓・獣坑・器坑に三別される。

A　人墓　六種類に区分する。長方形、また方形にほった坑だけで、そのなかに深く掘った棺穴がない。

1、単全墓　一基に完全な人骨一体が葬られている場合である。すべて長方形で、副葬品のある場合は、戈か犬がはいっているが、ないものもある。

2、多全墓　一基の中に二体以上の完全人骨がある場合で、一〇体に及ぶこともある。墓室は長方形である。副葬品のあるものは非常に豊富であり、戈や刀などの兵器や、鼎・爵・觚・觶・匜などの礼器もある。

3、身首墓　長方形の墓室に首と胴を切断して埋めてある。首と胴は必ずしも同一人のものではなく、別々にはいっている場合もある。人骨だけのものと、副葬品を伴うものとがある。一基に大体十人の身首がある。各人は、それぞれ刀子と有柄の戚と、有孔の礪胚を一セットとして伴っている。すなわち十組入っている。昔は礪を携行して随時研いたらしく、詩経や書経に「修二我戈矛一、砥二礪鋒刃一」という句があるが、この事実で裏づけられる。このほかに大刀十振、戈十本をおさめたものもあった。

4、人頭墓　方形の坑に頭部だけ埋めたもの。頭数は普通十個位であるが、最も多い例は三七個、少い例は二、三個のもあった。副葬品を伴うものでは、銅鈴が一〇個出土した。

5、無頭墓　長方形の墓穴に胴体だけを埋めたもので、人頭墓に対応するものであろう。やはり十人位埋めてあるのが多い。

6、罐葬墓　陶罐に入れて葬ってある。罐は完全なものはなくて、みな破損している。被葬者は子供である。

このうち単全墓と多全墓とは、人骨の遺存がかなり良好なのに対し、身首墓と無頭墓とは、かなり破損している。

墓穴の規模は、十人骨の出土したものでは、長さが二メートル、幅が八〇センチから一メートル程度、深さが三メートル程の小坑であり、そこへ人骨十体がはいっていたのであるから、死体から分泌する水分などによって腐朽しやすかったのであろう。

B　獣坑

1、馬坑　一坑に一、二匹のものから、最も多いものでは三〇匹以上を数える。馬頭には羈がつき、方形で中央に穴のある鑣はあるが、口の中に入れる銜はない。当盧を額につけている。

2、象坑　二基ある。一基は比較的小さく、埋葬の象も小さく、牙もはっきりと認めがたかった。もう一基の方は非常に大きく、牙も長大であるが、ひどく破壊されている。その象の側に一人の象奴が俯身葬されていた。

3、その他の獣坑　羊、牛、鹿および不明の獣骨と鳥がある。鳥は長脚をもっており、鶴のようである。

C　器坑

1、車坑　非常に大きな一坑には二五車輛がはいっていたとみられる。五輛一組から成っており、五組に分れる。これは一輛を完全にこしらえて並べているのではなく、車の部分品を置いたのである。

2、器坑　器物を埋めた坑で、三坑ある。一坑は径六〇～七〇センチもある大きな円鼎を伴い、他の一坑は小さな円鼎、最後の一坑は一個の把手をもった珍しい小鼎を出土した。

これらの墓の分布について述べると、先述した如く、西北岡の中央に楷河村から侯家荘・武官村へ通じる大道があるが、その西側を西区、東側を東区とした。西区には大墓八基・小墓一〇四基があり、東区では以前に三基発掘し、後に郭宝均氏が一基発掘したから、合計四基の大墓と一一一七基の小墓がある。西北岡で発見した殷墓は合計一二三三基。大墓は一二基、小墓は一二二一基で、そのうち完全なものが四三九基、部分的に乱れているのが四一九基、完全に盗掘されているのが一八八基、未発掘のものが一七五基、但し未発掘でも形から身首墓か人頭墓かは見当がついている。

西北岡の墓が殷代のものであるということは殷の都であった小屯と同様に、西北岡からも白陶・釉陶・甲骨、玉器などが出土しており、とくに小屯で注目された石彫人像や鯨骨器もここで出土している事実から確められた。

次に前章でふれた濬県辛村の衛侯墓と比較すると、衛侯墓は二道墓である。これを諸侯の墓とすれば四道墓は当然それよりも地位の高い王、または帝の墓であろうと想像できる。さらに小屯の周囲を発掘したが、ここのものよりも大きく副葬品のゆたかな墓は発掘されなかったから、ここが殷王の墓所であると仮定してもさしつかえはない。

四　器物

器物は多量出土したが、概略を述べるにとどめたい。

土器　数量も種類も多い。灰、白、釉の三種類がある。灰陶

は多く無地で一部分に繩蓆文がある。器形は豆・鬲・盂の三種が非常に多く罐もある。白陶にも刻文と繩蓆文と無地の三類があり、形は豆・𣪘・罍・甑・鼎である。釉陶は褐色釉で、罐のような形で、上に蓋があり、下に円形の脚のついたものもある。この類は非常に薄いが、水は漏らない。光沢もあり、後世の磁器のようである。

石器　立体の彫刻は人間像のほかに、虎・竜・鶏・牛・魚などの形もある。双頭の獣と呼んでいるものは梅原博士が案または禁とされている。楽器として磬がある。刀・戈・礪のセットをなす兵器、璧・笄・魚形・象形の玉製品があり、象形は緑色の玉である。石製品の中には、幾何学文様の装飾品が多く、円形・長方形・三角形・葉形などいろいろの形をしている。

骨器　笄・梱・皿・卣・花骨（有文の用途不明品）・象牙製品もある。

貝製品　天然の貝殻に穴を穿って、繋いだものもあるが、円形・長方形・三角形など各種の装飾品につくり上げている。

銅器　多く出土したが、兵器・礼器・車器の三種に区分できる。

木器　木器の痕跡、いわゆる花土がある。豆・罍・盤などの器形が残っている。

その他　非常に薄い層があり、乾いた時には見えないが、ぬれた時には認められる漆器のようなものがあった。

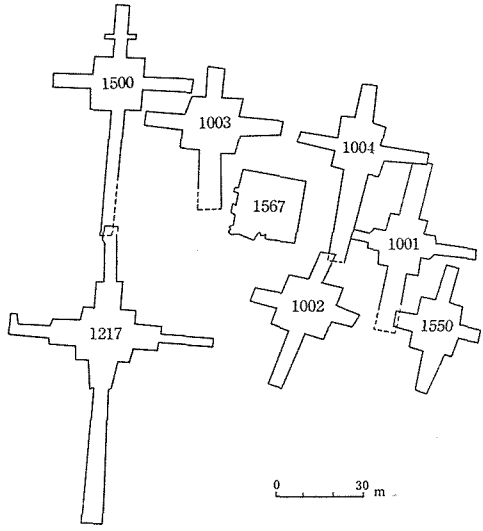
五　相関的問題

1、墓地の範囲　先に、西北岡が東西二キロ、南北三キロであることを述べたが、われわれが発掘したのは、東西五〇〇メートル、南北三〇〇メートルにすぎない。中央の道路を基準にすると、中央の約一〇〇メートル程と西方と北方には墓はない。しかも東と南の方はまだ端まで発掘していない。第九次の発掘の際、西北岡の南の侯家荘が殷代墓地の南端であることを述べたが、そこでは建築址もあり、多くの甲骨が出土した。ところが、西北岡では建築址は発見されていない。西北岡の墓と侯家荘の墓とが一つの範囲であるかどうかということは、現在まだ決定できない。

2、墳丘の問題　殷代に墳丘があったかどうかは非常に面白く、且つ重要な問題でもあるので、皆が注意している。私は当時おそらく墳丘を築いていたであろうことを立証しうると考えている。

第一には墓の上方について調べると、墓坑の頂部と地面の深さの問題である。現地表面から一・二～一・五メートル下で殷代の墓坑の上面に到着する。そして、西北岡の大墓はすべて盗掘されているが、残っている夯土は相当高く、墓地の上坑まで、同様に

第　2　図



西区大墓分布図
李済：殷虚白陶発展之程度　集刊28下

一・二～一・五メートルあるので、夯土は当時の地面より上に出ていたと考えられる。

第二には西区の大墓の分布を見ると、一〇〇一号墓の西墓道と北墓道は、一〇〇四号墓の南と東の墓道にそれぞれ切断され、一〇〇四号墓の南墓道は、一〇〇二号墓の北墓道に切断され、一五〇〇号墓の南墓道は、一二一七号墓の北墓道に切断されている。中央の一五六七号墓には墓道がないが、他の墓の中央にある。この様に多くの墓道が切断されているが、墓室が切断されているのは全くない。すなわち、墓というものは、墓室をもってその範囲としており、墓道は長大であるが、それは別の目的をもって築かれたものであって削られても差し支えないものなのである。このことは当時なんらかの地上標識があったに違いない。目印がなければ、他の墓室も削るということが考えられるからである。

第三に西区の八基の大墓はすべて盗掘を受けている。さらにその盗掘は、いずれも墓室を完全に掘り当てている。また、盗掘坑は墓室に対して内接円をえがく様に穿っているが、これは外部から見て標識がなければできないことである。

第四に西北岡をはじめ、最初に大墓を発見した後岡でも、墓のある所はみな岡という。それは何故であろうか。大きな墓を掘ると墓室が空間になる。掘りあげた土は地上に積み上げざるをえない。次に墓をつくると、その上に夯土を積み重ねて、更にまた土も積み重ねる。ところが、後に百姓達は耕す為に、そこを平坦に削平して行くが、夯土の所は固い為に削りかねて残り、自から高地を為す様になる。古典に安陽の北冢という語が見えるが、すでに古くから高い塚があったに違いない。

3、墓数と王数　大墓は東区に四基と西区に八基、合計一二基ある。盤庚以後の殷王として、盤庚―小辛―小乙―武丁―祖庚―祖甲―廩辛―庚丁―武乙―太丁―帝乙―帝辛の一二人が知られ

ているが、丁度大墓の基数と一致する。しかし問題は多くある。

大墓は墓道の数によって、四道墓八基、二道墓三基、無道墓一基に分けられるが、一体どの王がどの種類のどの墓に埋葬されたのか不明である。また東区の大墓は、四道墓一基、二道墓三基から成るが、その二道墓の一基からは女性用の梳子が出土しており、問題は多くのこされている。また、安陽出土の鼎の中で最大の司母戊鼎は、大戦中の盗掘で西北岡の出土といわれているが、どの墓か不明である。第一〇〇四号の大墓から大きな銅器が出土しているが、小墓からも大きいものが出土しているからである。

4、気候と習慣と地形　大墓の深さをみると、一五五〇号墓は一〇・九メートル、一〇〇一号墓は一二・〇メートル、一〇〇四号墓は一三・〇メートル、一〇〇二号墓は一三・〇メートル、一五六七号墓は四・三メートル（これは墓道もないので未完成らしい）、一〇〇三号墓は一二・〇メートル、一五〇〇号墓は一三・〇メートル、一二一七号墓は一三・五メートルであり、東の方が浅く、西の方が深い。これはどういうことであろうか。

まず気候の関係から考えると、掘った時の地下水面が違っていたと考えられている。深く掘れるが、雨期には地下水の水位が昇るので浅くしか掘れない。

もう一つの考え方は、人が死ぬと黄泉に行くというが、黄泉であるから、地下水の水面まで掘り下げて行くという習慣との関係から説明すると比較的妥当である。西北岡の地形は、中央の道を基準として、西区はだんだん高くなり、先述の双子井戸の所が一番高い。一五六号墓は双子井戸に近い。地下水まで掘り下げるとすれば、高い所は当然深くなる。西区が約一三メートルで東区が約一〇メートルの深さであるが、西北岡の高低差が三メートルであって大墓の深さは、地下水まで掘っていくことと関係があり、先述の気候条件とはあまり関係がないかもしれない。

5、埋葬の方法　一〇〇一号墓の南墓道では、一層には人間の頭骨だけ、その次の層には人間の軀骨だけという埋め方をしている。一〇〇二号、一〇〇三号、一〇〇四号、一二一七号の各坑は完全に盗掘されて、人骨は発見出来なかった。一五五〇号墓は、切断した頭骨の層―夯土の層―頭骨の層―夯土の層と交互に堆積しているが軀骨は発見できなかった。また、北墓道の階段では、各段に一〇個の頭骨が並んでいた。一四〇〇号墓の南墓道では、無頭の軀骨だけあったが、一五五〇号墓の頭骨に関係ある軀骨を一四〇〇号墓に埋めたという訳ではない。

また小墓も大墓の周囲にあるものもあれば、一方に集まっているものもある。全体としての法則はあるが、詳しく見るとそれぞれ違っている。

六　西北岡と中国の考古学

発掘に動員した人夫の数は、第一〇次では一〇〇人を九〇日間、第一一次では三〇〇人を九〇日間、第一二次では五〇〇人を一〇〇日間使って、合計八六、〇〇〇人にのぼった。中国考古学史上空前のことであった。しかし、この数字から推測して、殷代に墓を作るに要した人数を推すと、殷代の用具はわれわれの道具よりも効率が悪いことが考えられるから、殷代にこれだけの墓をつくるには、現在の要員数の二倍、三倍、すなわち一〇万、二〇万以上の人数を必要としたであろう。

殺殉、すなわち、殉葬する人の首を切断する場合、首の切り方がまちまちである。頸椎骨の残存例は一節から三節以上までいろいろある。これはぶった切りにしたからで、中には少し上を切られて、下顎骨を失っているものもある。まさに残酷といえよう。

殉葬の様子をさらに詳しく述べると、一四〇〇号墓の南墓道から、約一、〇〇〇本の矛と約一〇〇本の戈と銅盔・牛文鼎・鹿文鼎・磬などが出土。一二一七号墓の西墓道からは鼓と磬など相当数の楽器が出土。一五五〇号墓の北墓道には、先述の如く一〇階段から一〇個づつの頭骨があり、西墓道からは鑲嵌の竜形儀仗が出土した。一四〇〇号墓の東墓道から一群の銅器、寝小室盂・人面具・盤などが出土。一〇〇一号墓の周囲には、馬や車があり、兵士が埋められている小墓があらわれた。一〇〇三号墓の南墓道からは鯨の肩甲骨と車器が出土した。これらの副葬品は、盗掘を受けた後もこれだけの量があったのであるから、盗掘前は非常にたくさんあったと思う。残存しているものだけでも非常に大きな発見であり、考古学史上はじめての事であった。

中国の金石学は、北宋代より今日まで千年経過しているが、その断代の方法は、各人各様であって、固定した標準がなかった。西北岡から多くの遺物が出土してから後は、それらを断代の最もよい標準とすることができた。

従来中国の木器の一番古い例は、寿県あるいは長沙出土の戦国時代のものが知られていた。西北岡出土の木器の痕跡、花土ははるかに古い殷代に木器の存在を証明した。

次にセットをなす器物についてであるが、一基の墳墓から出土した遺物が一揃になった時、これを整套（ワン・セット）の器物と呼ぶ。例をあげると、一〇〇五号墓から出土した、中柱盂二・双耳大盂一・壺三・鏟三・箸三対・勺一、いわゆる鏡と呼ばれているもの一がある。また一〇〇二号墓の、爵二・觚一・觶二・角

一・斝二・卣一・方彝一の一〇器がある。一四三五号墓では、大円鼎一・小円鼎二である。この様に、種類も数量もさまざまである。これまでの考古学者は、個々の器物を研究していたが、この様な組み合せがいかなる関係を有しているのか、これからはセット関係において殷代の生活を研究することができる。

鑲嵌品とは、装飾品の中のさまざまな形の幾何学文様のものを言う。円形・長方形・三角形・鋸歯形・木葉形などある。材質も、牙・石・象牙・骨製などあり、その用途は不明であった。しかし、副葬品の中からさまざまなものを見つけ出してきた事から、円形や三角形は獣の眼の部分に使われたことが明らかとなった。鋳造のものや従来丙字形と呼ばれていたものが獣の歯に、二孔を有する半月形のものが舌であることも解った。また、眉や耳に相当するものも分ってきた。無論まだわからないものもあるが、獣や鳥の装飾をさらに研究して行けば、次第に明らかになってくるであろう。この鑲嵌物は、殷代の装飾の幾何学文様の研究の重要な資料を提供する。

以上、簡単に殷代の西北岡の輪郭を論述したが、ここにおいて西北岡の遺跡が中国考古学へ絶大な貢献をなすものであるといえるであろう。

第五章　第一三次より第一五次までの発掘

一　洹南発掘へ戻る

これまでの発掘は洹河の北で行われたが、この度、洹河の南へ帰ってきて、大司空村と小屯の二ヶ所で行なわれた。

フィールドの仕事は、墳墓の発掘と基址の発掘とに大別できる。基址の発掘にあっては、正常な生活を維持することができる。それは大体出土物の見当もつき、そのため仕事を朝始めて夕方に終るという一定の計画で行なうことが可能であるからである。

ところが墳墓の発掘の場合は、全く状況がちがってくる。生活が異常になり、病的になる。墳墓を掘るとき、上方のたまった土を取り除く時は、何もする必要はないが、下方の遺物が出てくるところになると、今度は異常に緊張して、二本の手では足りなくて、千手観音を呼んでこないと間に合わなくなってくる。

われわれは、前回まで洹河の北で古墳を発掘したが、この時は朝から一二時間働きつづけ、夕食後も作業を継続し、一二時になっても寝れないことがあった。こういう状況が長い間続くと、人間の体力には限界がある。洹河の北での墳墓の発掘は、まだ終っていなかったのだが、元来身体が丈夫でなかった主任の梁思永先生が病気になられたので、墳墓の発掘という異常な生活を止めて、

次	地点	日期	人員	記事
13 1936年 春	小屯	3月18日～6月24日	主持：郭宝鈞 院方 8人 省方 1人	集中 B・C両区
14 1936年 秋	小屯	9月20日～12月31日	主持：梁思永 院方 9人 省方 1人	分三区工作 C.I.I区の北
	大司空村	10月24日～12月10日	高去尋	殷代遺址及墓地 戦国墓地
15 1937年 春	小屯	3月16日～6月19日	主持：石璋如 院方 9人 省方 1人	集中C区

洹河の南の建築基址の調査という平常なる研究生活にたちもどることにしたのであった。ところが、いざ掘り始めてみると、発掘方法も墳墓の場合とは異り、出土品も増加してきて、少しも休息にならず、依然として緊張した生活、異常な生活を送らねばならなかった。

二　小屯の殷代の建築基址の分組

小屯が殷代の建築遺跡であることは分っていた。その遺跡[13]は明らかに三地区に分れる。北方が甲組、中央が乙組、西南方が丙組である。甲組では一五ヶ所、乙組では二一ヶ所、丙組では一七ヶ所の基址がある。甲組の諸基址は以前の発掘で、すでに述べているので、ここではふれない。乙組のうちで、黄土堂基というのは、早く発見されていたが、それ以外の基址は、第一三次以後の発掘で明らかにされたものである。丙組は規模が比較的小さい。したがって、ここでは専ら乙組について論述する。

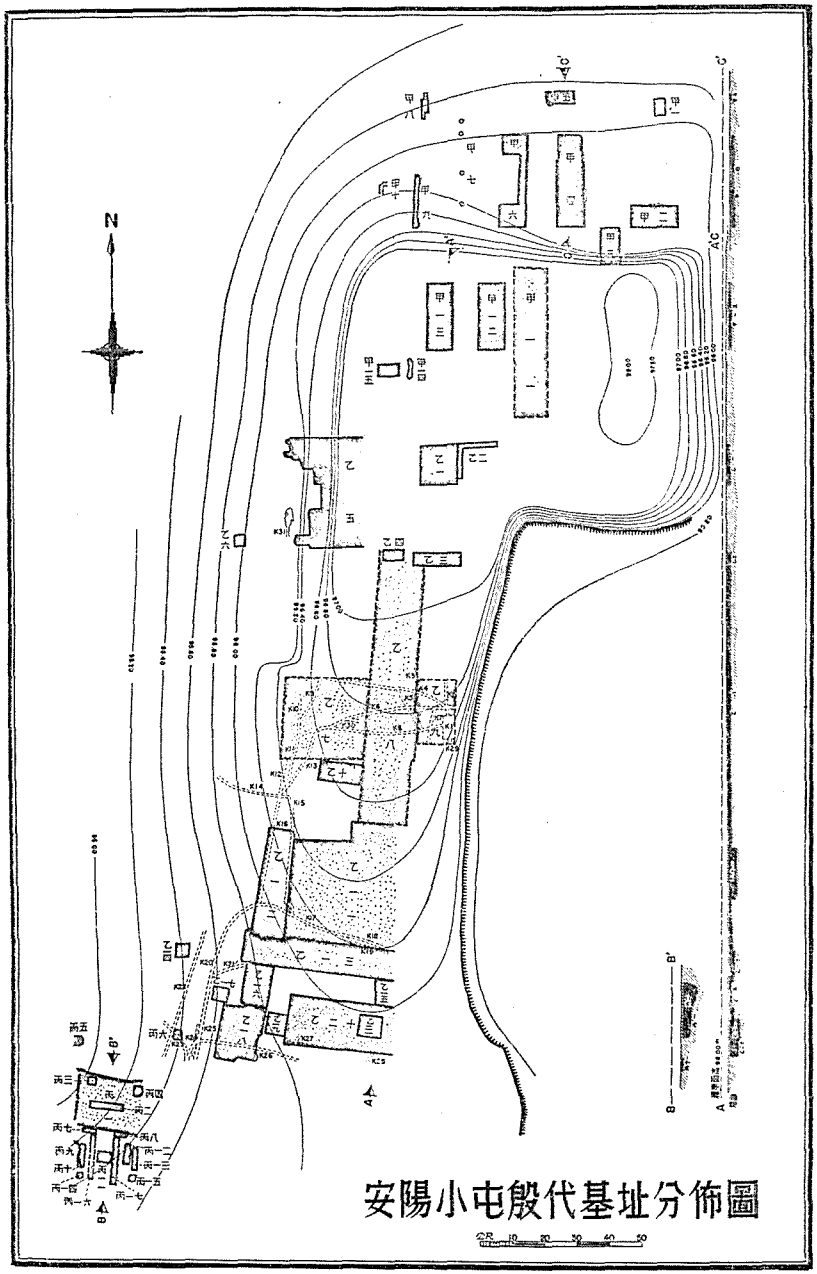
甲、乙両組を較べると、建物の形も性質も異っている。まず方角について見ると、甲組の建物は東向きのものが多い。乙組は南向きと東向きとがあり、大きな主要な建物はみな南向きであって、小さな、従属的な建物だけが東向きである。丙組は特殊で、一七基の中で九基址は南向き、四基址西向きで、四基址が東向きである。建物の性質が異ると、方角もこの様に異っているのである。

三　乙組基址と殷代の宮址について

A　基址の構成　黄土堂基（乙一）を中心に一線を真直に南に引くと、この度発見した建物は、みなこの線から西側にある。乙三基址は三門を有する。乙八基址は南北に長く、多くの小部屋がある。乙七基址については後程詳述する。乙一一基址は南端にあり、別の形式をもっている。

乙組は甲組の建物と比べて非常に違っている。甲組の方は非常に散漫であるが、乙組は北から南にかけて一組の建物、すなわち

第 3 図



院落をなしている。しかし、われわれが発掘できたのは、西の半区だけであり、東の半区は河によって破壊されていた。発掘した範囲が、全体の規模の半分であるのか、三分の一であるのかもはっきりしない。

B　基址の方角　ここに述べる方角というのは、個々の建物の向きではなしに、全体としての方角である。それは北に対して東に10度偏っている。この10度というのは、太陽による南北線と関係がある。われわれは磁北を基準としているが、ここでいう南北は太陽の南北である。現在、この土地の人達が畑を区切る時には、南北線は、みな太陽の南北線によって区切っている。

C　基址の建造　乙七基址を例にして述べると、殷の宮廟の建造において、四行程が認められる。

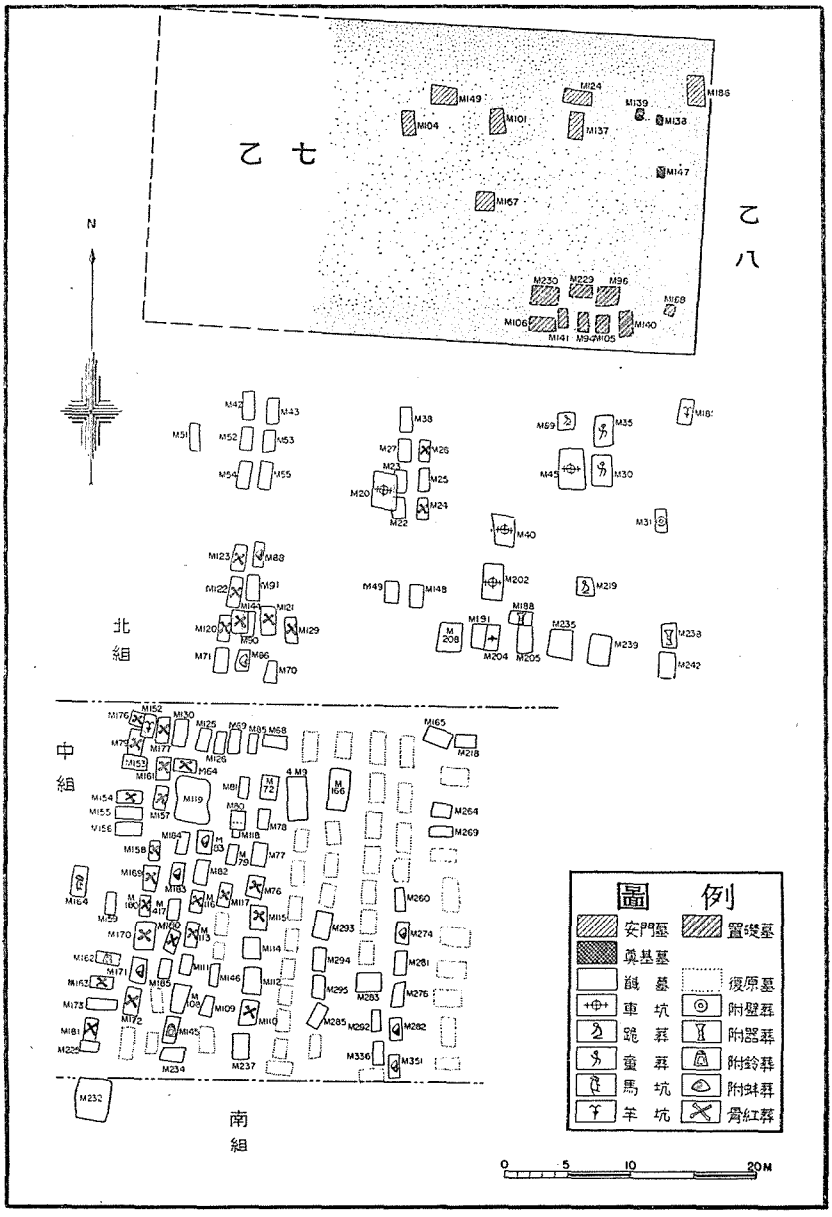
(1)　奠基　基を定めること。この奠基が、また三過程に分れる。殷人は建築の基礎の工作を固めることに非常に注意する。第一に基坑、建物の下の基盤になるところを掘る。更に、その下に小さな坑をもう一個掘り、基牲と呼ぶ犠牲を埋める。大きな重要な建物であれば、人間の子供を埋めるが、重要でない小さな建物では狗を犠牲にする。犠牲を埋めた後、奠基の典礼を行う。その後、土を埋め戻すのであるが、一層一層と版築によって叩き固めて行く。

(2)　置礎　礎石を置くこと。版築による夯土がある程度の高さまで達すると、また牲坑と呼ばれる犠牲を収める坑を掘る。その中に、三牲―牛と羊と狗―およびそれをひきつれた人間を土で埋め、同様に版築でそれを固める。その上に礎石を置く。礎石は犠牲坑の直上に置くこともあるが、それ以外の所に置いてあることもある。乙七基地について見ると、礎石を置くやり方がいろいろ違うので、したがって牲坑の儀式を行う場所も、また違っているのである。置礎は現代の棟上げ式と同様の意味を持っている。中国では、建築が棟上げまで進行すると、友人や親戚がお祝をしてくれる。棟上げをする為には柱を立てねばならず、柱を立てる為には礎石を置く必要がある。殷代に、礎石を置く為に、こういう儀式を行なったことは明らかである。

彼らの柱のたて方も違っている。今日では、地上に礎石が露出していて、その上に柱を立てるが、殷代の人達は、柱を連絡するということを知らなかったのか、一本一本を独立して、安全に確実に立てることを求めたので、地面に穴を掘って、柱を埋めてたてるという方法をとっている。

(3)　安門　門を装置すること。壁もでき、屋根もつくられ、建物ができあがると、次に門をつくって、はじめて建築は完成する。その場合にも基坑を掘り、牲坑を掘り、犠牲を埋めて、版築

第 4 図　乙七基址と墓葬


乙七
乙八
N
北組
中組
南組
圖例
安門墓
置墓
墓
獸墓
復原墓
車坑
附壁葬
跪葬
附器葬
童葬
附鈴葬
馬坑
附蚌葬
羊坑
骨紅葬
0 5 10 20M

によってそれを埋め戻すのである。

安門のためには三種類の犠坑がある。第一は、門の外側に、一坑に一人づつ、合計四人を犠牲にしている。うち、三人（M一〇一、M一〇四、M一三七）は南向きで、戈を持つだけだが、もう一人は北むきで、戈のほかに楯、すなわち干戈を持っている。

第二は門内の犠牲で、二坑ある。一坑（M一四九）は二人を埋め、他の一坑には、三人と二匹の狗が埋めてあり、端の人は頭に装飾をつけている。

第三は、東側の一坑（M一八六）に埋められた九人である。副葬品として、脊背刀と呼ばれるものが一件あったが、これは西北岡でも出土しており、伴出品から見て、おそらく料理用の刀であろう。そのほか、握りのところが獣形をした小刀が二件ある。それから木器は腐っていて、土に印痕が残ったいわゆる花土が出土し、文様だけは分るが、実体は不明である。この安門の儀式で犠牲にされた人間は合計一八人である。

(4) 落成　落成式は、家の内ではなく、外で行う非常に規模の大きな儀式である。これに関係した埋葬は北組・中組・南組の三部に分れている。

北組　これは五台の車を中心とした二種類四七個の坑があり、この組を戦車隊ということができる。

1、車坑　五個所、二種類ある。真中にあるM二〇は完全に残っており、馬を四匹埋めてあった。一部分盗掘されていたが馬を二匹埋めてあった一坑（M四〇）がある。それ以外の三坑は完全に盗掘を受けていた。そのうちのM四五は、面積がM二〇に等しいから四匹の馬を埋めたと想像される。他の坑は、二匹であったらしい。これらの各坑には、馬のほかに一台の車と、一組の武器をたずさえた三人の人間が埋めてある。その一組の武器とは、弓・矢・矛・刀・礪で、三人は、主人と射手と御者である。主人と射手は、この五種類の武器をもっているが、御者は馬を御するのが目的であるから、弓と矢がなくて、戈と刀と礪の三種だけを持っている。この五種類を組にするのは、遠距離には弓で矢を射、近づくと戈を使い、更に接近すれば刀を使うという風に、距離によって武器をかえるからである。四頭の馬を持ち、車の先に虎の頭をつけているものは、指揮者の車である。

2、五人墓　車坑の前端に五坑が並んでいて、車の衡に当る。各坑に五人づつ埋めてある。

3、馘墓　首だけを埋めてある墓。西北の方に一八基ある。

4、単人墓　一人だけ埋めてあるもの。西側の端に孤立している。

5、三人墓　一坑に三人埋めた墓。車坑のすぐ側にあり、

元来一〇坑・三〇人あって然るべきであるが、一坑を欠き、その代り一坑に六人を埋めているものがあって、総数は三〇人になっている。三人墓が車の側に並んでいるのは、戦車には三人乗って戦うが、この三人はその予備として、交替して戦う訳である。

6、跪葬　跪まづいて葬られている人の墓。馬と関係があるだろうと思われる。

7、童葬　車の両側にある、子供を埋めた墓。二基

8、負器墓　二人の人間が、銅器を背負って跪いて埋められている墓。五人墓の中央のものの北側に一基（M一八八）ある。出土銅器は、甗一・鼎一・觚一・爵一・罍二・斝二の八件である。

9、随器墓　随葬品の墓。一番東側の二基（M二三八・M二四二）である。M二三八には、礼器・兵器の外に五人が埋められている。それぞれ五種の兵器、弓・矢・戈・刀・礪と・石の戚・鉞・杆・錘、これも各人がそれぞれ持っていた。これ以外に礼器が一二件出土した。人は俯身葬され、犠牲としてではなく、品物と見なされている。

10、狗殉墓（附璧葬）　東側の中央にある（M三一）。人間一人と璧一件が出土し、腰坑内に狗を殉葬していた。

11、羊坑　東北の端にある羊を葬った墓。

これらの墓群の分布について、中央に線をひくと、西側のものは、すべて頭がないのに対し、東側の子供とか、跪いている人とかは、皆頭も体も完全に揃っている。西側の首が切られているのを見ると、皆体が頑丈である。東側の体の完全なのを見ると、子供であったり、骨も弱々しく腐っていたりする。西側のは戦闘者で、東側のは軍の後詰をする年寄と子供である。軍右（西）、軍左（東）という言葉があるが、殷代に、すでにそれが認められる。

中組　北組の西南に当る地区で、西端の孤立した一基を除くと、東西に一一列、南北に一一列の一辺約二五メートルの正方形になっている。五等級に分れる。

第一級は西端にある孤立したM一六四号基一基だけである。これが他と異る点は、人のほかに馬一頭と犬二匹の殉葬が見られる点である。人物は北枕の俯身葬で、腹の下に弓・矢・戈・刀・礪の一組の武器を持っている外に、玉刺と陶器四件を伴っていた。馬も装飾品をつけていた。

第二級は二基あり、三人埋められている。みな鉢巻（額帯）をしており、その中央に一個、両端に各一個の銅鈴をつけている。

第三級の人間は、二一人で、六坑に葬られている。その特徴は、額帯の両側に二個づつの貝殻の装飾をつけている事である。

第四級の人間は合計一〇〇人、二五基発見されている。骨に赤い色が附着しており、副葬品はなかった。

第五級のは四五坑中に二五三人発見したが、特徴は、頭を切り、赤色をぬらず、白骨のままで俯身葬された点である。

この区域は、盗掘されていたり、破壊されていたり、また坑があっても人骨がなくなっていたりして、ひどく乱れている。現存し発見したものは、七九坑・三七八人であるが、原初は一二〇坑・六二人あったと推定できる。この六二五人という数は、一営の数に相当する。

南組　西南の隅に一基しかない。非常に特殊なもので、上・中・下の三層に分れている。上層には、両端に二匹、真中に一匹、計三匹の狗が埋めてあった。中層には、槨・棺・腰坑があり、棺内の主人骨は腐っていたが、棺外・槨外の八人の殉葬骨は、比較的よく残っていた。殉葬品は礼器・兵器その他装飾品など合せて五〇件が殉葬者の体の上に乗っていた。棺内には赤いものがあったが、朱かどうかは不明である。

以上、三地区の犠牲は重要な建物の落成式として、埋められたものである。北組と中組の指揮者は、それぞれ西端のもので馬を殉葬しており、南組の一基は副葬品も多く、全体の指揮者のようである。ひとつの建物の落成の為に、かかる大量の犠牲を殉葬するという事実は、驚くべきことである。

この乙七基址は如何なる建物であり、何に使用されたものであろうか。ここで行なわれた八五〇人の人間・一五匹の馬・一〇匹の牛・一八匹の羊・二四匹の狗という多くの犠牲を考えると、この建物は生きた人間の住居ではなく、宗廟、つまり先祖の霊位を奉じている建物であった可能性が強い。一方、甲組の建物は様子が全然ちがっており、このように多くの犠牲を埋めていないので、人が住んでいた宮殿とみとめられる。

四　遺跡と古籍

殷墟の遺構を古籍[14]の記事と照合するものとして、甲組第四基址と考古記、乙組第七基址と周礼・天官篇の二例があげられる。

まず、周礼考古記に次の記載がある。

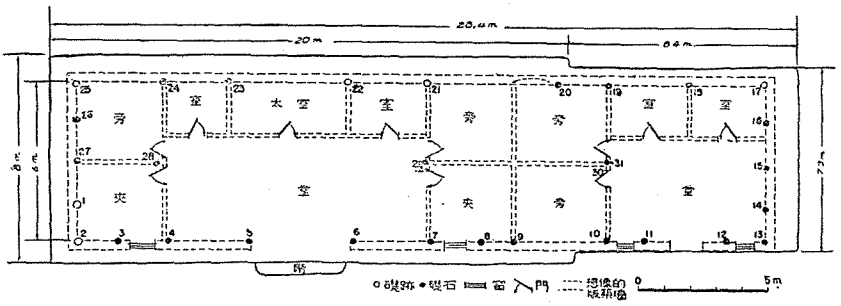
夏后氏世室

堂脩二七、広四脩一、五室三四歩、四三尺、九階、四房両夾、窗白盛門、堂三之二、室三之一。

「夏后氏世室」は、この文章の主題であり、夏后氏の大きな室という意である。昔、師匠が弟子に教える時には、歌でそれを伝えた。韻文あるいは四字句・五字句であると、記憶しやすい。これは、師匠と弟子との間に伝えられた大工の歌である。

「堂脩二七」の堂は比較的大きな部屋である。脩は長さという意である。二七というのは、これまで解釈がつかず、兪樾は、こ

第 5 図　殷代基址と夏后氏世室平面図



の「二七」は昔の古本にはなく、六朝の頃に山東の礼家の本によって補ったのだと解釈しているが、私は最初から存在したと考える。この二字があってこそ、句も整い、読みやすくもなる。では、これをどう解釈するのかといえば、「堂二脩七」、つまり堂が二つ、長さが七間であるという意。これを甲四基址にあてはめてみると、基址の東側の線は、北端から堂・旁・夾・堂・夾と並び、第二の堂が三間になるので、間口が七間になり、その中で堂が二室あるということではなかろうか。

次の「広四脩一」というのは、長さと幅との比率が四対一という意である。これには三つの異なる測り方がある。一は礎石間の距離で計算する方法で、東西両端の礎石間の距離六メートルで南北両端の礎石間の距離二六・二メートルを測れば、三倍の時には八・二メートル短かく、四倍の時には二・二メートル短かく、五倍の時には三・八メートル長いという事になる。二は基址の南短辺八メートルを基準にする測り方で、長辺が二八・四メートルであるから、三倍の時には四・四メートル短く、四倍の時には三・六メートル長く、五倍の時には一一・六メートル長いという結果になる。その三は、基址の北短辺七・三メートルを用いる方法で、三倍すると六・五メートル短く、四倍すると〇・八メートル長く、五倍すると八・一メートル長くなる。それぞれの場合において、三・四・五倍の数値を比較すると、四倍の比率の時は、長いのも短いのもあるが、その差が一番少なく、北短辺を用いた時などは、〇・八メートルにすぎない。故に比率として、四対一が最も近く、この句はこういう関係を述べたものであろうと、甲四基址から考えられる。

「五室三四歩」。室というのは、堂のうしろの小部屋であることは明らかである。南の堂の後に三室、北の堂の後に二室あり、計五室になる。歩というのは、部屋の面積の単位である。三四歩というのは、室に三歩のものと四歩のものがあるということであ

る。甲四基址においては、小さいのが四室あり、これが三歩の面積である。南の堂の直後にあるのが、四歩の面積をもつ室で、太室といわれるものである。

「四三尺、九階」というのは、私見では、「九階」が先で、「九階、四三尺」とすると、先句と対になり、読みやすくもなる。両堂の前には階段がある。南堂の前のは確認できたが、北側のはなくなっていた階段の構造については、後岡の殷墓の北道の階段によると、幅〇・四メートル、高さ〇・二メートルである。南の階段の段数は不明ではあるが、基址の高さが一メートルであって、段幅が後岡と同じ〇・四メートルであるから、かりに高さも後岡と同じとすると、五段になる。北の階段は残っていないが、くりあがってへこんでいるので、四段の可能性がある。南が五段、北が四段とすると、計九段となる。次に、四三という事であるが、それは階段の幅が異なり、南が四層で北が三尺であるので、その4対3という比率をここで裏づけた事になる。

次に「四旁両夾」であるが、釈名の定義によれば、旁は室のかたわらにあること、窓がないことの二条件が必要である。これを基址の上で見ると、西側の三旁、旁はいずれも室の隣にあり、窓がなく、条件が完全である。東側にある一旁は、室の隣りではないが、窓がないという条件が合うので、結局、四旁になり、合致する。夾についても釈名の定義があり、堂の隣りにあること、一方に窓があることの二条件がある。南の堂の両側が夾であるが、部屋の一辺に、柱のための二礎石以外に、もう一石あり、これは窓を設置する為の礎石とみられるので、二条件に合致するのである。したがって、南堂の両側に二つの夾、後に四つの旁があり、甲四基址が四旁二夾という句に合致するわけである。

「窗白盛門」という句は解釈が困難である。孔広森は、この句を「窗白盛」で切り、「門」を下句につけて「門堂三之二」と読んだが、これは、句を殺してしまうので、賛成しがたい。「白盛」というのは、孔広森も説く如く、貝殻を焼いた石灰を窓や門に白く塗るのであるが、問題は「窓門」が一つのものであることである。昔の窓は四角で、それに二枚の扉がしつらえてある。朝はこれを開き、夕方になると閉じて壁と同じようにする。その為、窗戸といわずに、窗門といっているのは、昔の面影をよく残しているわけである。白く塗るのは、窓を内側に開くと、光を反射して部屋の中が明るくなるからである。

「堂三之二、室三之一」というのは、堂の占める面積が三分の二、室の面積が三分の一になっているのをいうのである。昆明にある一建物では、一堂に四室が附いており、前に壁がなく、直接出入することができる。殷代の建物はこれと全く構造がちがって

いる。一つの堂であれば問題はないが、甲四基址の様に多くの部屋を付加していると、堂と室の間口が等長であれば、両側にある旁は出口を失ってしまう。そこで、門を開く為に、室が北に後退し、堂が広くならなければならない。また堂というのは、客を接待する大事な場所であるから、広くする必要も起って来たのである。

以上述べた如く、考古記の記述とこの甲四基址とは全くよく符合する。

次に乙七基址と周礼の天官との比較である。周礼の天官に、

閽人、王宮毎門四人、囿游亦如之。

閽人、掌守王宮之中門之禁。喪服凶器不入宮、潛服賊器不入宮、奇服怪民不入宮。

寺人、王之正内五人。

寺人、掌王之内人。及女官之戒令。相道其出入之事而糾正之。

この二文を乙七基址にあてて考えたい。

「王宮毎門四人」とあるが、これは、正に門のところに四人が戈と干とを持って、それぞれ外向き内向きの姿勢で守っているというのであり、確かに遺物を持っていたものや、出土位置から見ても、王宮を守っていると思われるものがあるから、この四人というのは、恐らく根拠のあるものであろう。「囿游亦如之」とあるが、おそらくそうであろう。これは廟であり、ここにいるのは死んだ祖先の霊である。だから、これも人が死んで守っているわけである。生きた人間の宮殿であったら、朝から晩まで交替で生きた人間が四人で矛を持って守ったのであろう。「王之正内五人」というのは、解りにくい言葉ですが、これは先述した様に、門のうちで三人と二人、計五人が守っている。この人達も、女官を監督しているのだから、一種の監督する道具を持っていた。ここの三人のうち一人は、笄を多く持っているが、その中に李済が鋒刃と呼んだものがある。これは、幅は指三本位で三角形の文様があり、先が刃になっている。笄という人と、武器とする人とあるが、日本では女性が笄を武器にして悪い奴が来たらそれで眼を突くという話であるが、一種の武器であろう。

詩経に「時維婦寺」という句があり、婦と寺とが結びついている。経典釈文は寺人の条の下に鄭康成の説を引いて、寺というのは、閹者すなわち宦官であると述べている。この骨は、比較的華奢で小さく、女性か閹者か不明であるが、閹者という事になれば、宦官が殷代からあったという事になる。

第六章　小屯と西北岡

北岡の問題

西北岡は小屯の北にあり、北の方は高地になり、西南は河である。ところが、濬県辛村の衛侯の墓を見ると、これは淇河の南にあり、その北はやはり高地になっている。ただ、殷の都城は小屯にあって、明らかであるが、衛の場合には、その都城がどこにあったかわからない。しかし、この両者の位置は、山と川とに対する関係位置においては同様である。墓地として、当時この地勢を選んだのは、高いところに墓をつくっておくと、水害を免れるという理由から選んだのに違いないが、後になると変ってくる。秦の始皇帝の墓だけが型破りで、華山の北、渭水の南にある。漢になると、都は長安になり、その北の咸陽の陵の上の高いところに墓がある。唐になるとさらに北に行き、さらに高くなり、とにかく都城から北方の高地にあるというのが、一つの型、規則になって来る。これから見ると、殷代においては、ただ都城の北の方に墓をつくるというだけの事であったのに、後には理屈をつくり出し、さまざまな事を附加する様になったのである。

隔河の問題

河をへだてて墓をつくるという問題である。中国の諺に、「よく千山を隔つるも、一水を隔てず」というのがある。後に、幽霊は水が怖いので、河で境界をつくっておくと、来る事は出来ないといわれている。殷人が鬼を畏れ尊んだことは事実であり、この様な河を隔てるという考え方が、殷代にあったかどうかは不明にしても、ともかく考えられる事である。

周礼は後代に成った書であり、信拠しがたいといわれるが、殷代の遺跡と比較して行くと、合致する所が多くある。殷人は観念を持って選択したのか、ただ地形からだけで選択したのかは解らない。あるいは、地形から選択したのかも知れないが、だんだん事実の上に理論を見つけ出して行き、漢唐になればそれぞれ説をなし、あるいは陰陽家が更に出て来るという事になって来たのである。

以上五回、いろいろと論じて来たが、殷代の文化は相当高く、偉大であり、その殷墟の発掘は相当大規模なものであった。口下手の為、十分伝える事は出来なかったが、お気付きの点があれば、御教示を請う次第である。

① 董作賓「民国十七年試掘安陽小屯報告書」（『安陽発掘報告』Ⅰ期一九二九）

② 李済「小屯地面下情形分析初歩」（同上）

③ 李済「民国十八年秋季発掘殷虚之経過及其重要発現」（『安報』Ⅱ期一九三〇）

④ 石璋如が民国32年に調査したもので、斗門鎮に漢代の石刻が三処あり、一つは東嶽廟にある牽牛像、二はその東三里の石婆廟にある織女像、三は鎮の南麦田中にある石魚像で、共に花崗岩でつくられている。

⑤ 李済・梁思永・董作賓『城子崖』（中国考古報告集之一）

⑥ 李済「安陽最近発掘報告及六次工作之総估計」（『安報』Ⅲ期一九三三）郭宝鈞「B区発掘之一、二」（同上）

⑦ 石璋如「第七次殷墟発掘E区工作報告」（『安報』Ⅳ期一九三三）

⑧ 梁思永「後岡発掘小記」（『安報』Ⅳ期一九三三）

⑨ 郭宝鈞「濬県辛村古残墓之清理」（『田野考古報告』1一九三六）

⑩ 石璋如「河南安陽後岡的殷墓」（『集刊』31　一九四八）

⑪ 梅原末治『殷墟発見木器陰彫図録』（一九五九）

⑫ 董作賓・石璋如・高去尋『侯家荘』（中国考古報告集之三）

⑬ 石璋如「河南安陽小屯殷代的三組基址」（『大陸雑誌』二一の一二民国49、石璋如『小屯』第一本　殷虚建築遺存（中国考古報告集之二民国48）

⑭ 石璋如「殷代地上建築復原之一例」（『院刊』第一輯）

as a royal tax was converted to feudal rent attributed to the new landowners (=feudal lords).

Shih Chang-ju: Archaeological Outline of *Anyang* 安陽

by

Takayasu Higuchi

Excavations of *Anyang-yin-hsii* 安陽殷墟, one of the most important world archaeological excavations in this century, was held fifteen times in all from 1928 to 1937; but we have not altogether a full summary that explains the whole aspect of the investigation.

Shih Chang-ju 石璋如, a participator of the fourth excavation as a student of *Honan* 河南 University, has been a member of the examination after the fourth, was charged with the transference, protection and arrangement of its relics after the outbreak of the war, and now specialises in study and publication of the massive materials as a member of History and Language Department, Central Research Institute, Formosa. This note is the very one that *Setsu Onoyama* 小野山節 and *Takatoshi Yoshimoto* 吉本堯俊 rewrote an interpretation by Prof. *Takeo Hiraoka* 平岡武夫 in the *Shih Chng-ju* 石璋如 's special lecture "Archaeological Outline of *Anyang* 安陽" for five days from Oct. 22nd at the Literature Department of Kyoto University on the occasion of his staying in Kyoto while he came to Japan for study in the 35th year of Showa (1960).